



【青の樹林】 絵・文：白澤 患舟

厳寒の二月の樹々は、凍てついた体から神秘的な青色のきらめきを放散する。ただ、耳をすませば、遠くに春の音もかすかに聞こえる。

時事所感

会長 菅原 三朗

100年に一度の非常事態といわれ、政府は財政再建やプライマリーバランスの達成を一時棚上げして、ひさびさの財政出動による内需拡大をはかり景気浮揚につなげようと、二次補正に引きつづき新年度予算の審議中であるが早期の執行を望むとともに、国民の閉塞感を打破するためにも一刻も早い衆議院の解散総選挙の実施により、清新澆刺たる新リーダーの出現が待望されるところである。

内需拡大政策の目玉が農業の再生やグリーンニューディール政策や福祉の充実等といわれるが、これ迄の構造改革の政策で多年に亘り痛めつけられてきたものが、この程度の財政手当で直ちに方向転換出来とは思えない。負の遺産の後遺症は甚大なものがある。

秋田での最大の問題は、急激に進む人口減少である。昨年1年間でも

12,000人以上減少し、老年人口率が最高・年少人口率が最低を記録し少子高齢化が更に進行している。しかも問題なのは減るのはほとんど若い世代であり、一番の働き手・子育て世代の24歳から49歳であり、この若い世代で16万人くらいに減り、65歳以上の人口が増えている。このような現象がこれからも進むとみられ、このペースで人口減少が進むと2035年には、県の人口は78万人になってしまい明治32年に戻ることになる。その時の労働力人口は22万人減少するという。秋田県の総生産は4兆円であるが2035年には1兆円減って4分の3ぐらいに縮まるだろうといわれ、人口減少によって県内の経済活動も大きく損なわれる。それくらい人口減少のインパクトは大きい。一昨年8月発足した「秋田県定住促進協議会」の実効ある活動を大いに期待したい。

一方本県の自殺率（人口10万人当り）が一昨迄13年連続で全国ワーストであったが、昨年の自殺者は過去10年で最悪だった2003年の559人に比べ154人も減少した。市町村や

各種団体・機関が相談機能の充実など、予防対策を継続的に推進してきたことが実を結んだものであり高く評価されてよいと思う。

又本県の小学6年と中学3年生の全国学力テストで2年連続トップクラスの成績を収めたことは本当に喜ばしい快挙である。しかし寺田知事は文科省の実施要領に反して、県内25市町村の平均正答率を公表し市町村からの猛反発に会い、各市町村教育委員会は来年度の参加の是非を検討している。しかしそのような事よりも子供達の高い学力は進学率の上昇に繋がるものであるが、多くの若者が首都圏を中心とした県外に進学し、卒業後は県内に受け皿が少なく帰ってこないのが、ますます人口が流出し若い活力が失われていくことの方が重大問題である。昔から秋田は若い人材の育成・供給県といわれてきたが、行政も県民もそのような優れた子供達が将来にわたって、地元で頑張れるような土壌づくりをどう進めていけばよいのかが、より重大な課題であることを認識すべきである。

平成20年度第4回理事会

県協会は1月22日、秋田ビューホテルにて平成20年度第4回理事会を開催した。

会議では、国が建設企業の金融の円滑化を推進することを目的として実施

する「地域建設業経営強化融資制度」の導入を決定したほか、公益法人改革に対する取り組みとして、プロジェクトチームを立ち上げ、内部検討を進めていくこととした。



議題は次のとおり。

報告事項

- 1) 中間監査結果報告
- 2) 常置委員会の開催結果について

協議事項

- 1) 下請セーフティネット融資事業規約の一部改正（案）について
- 2) 地域建設業経営強化融資制度の導入について
- 3) 玉川保養所利用料金の見直し（案）について
- 4) 建災防秋田県支部からの借入金について
- 5) 会費等について
- 6) 公益法人改革に対する取り組みについて

建設業に働く女性職員交流会

女性が働きやすく意欲と能力を發揮できる職場作りに向けて

県協会では、平成20年12月12日（金）秋田ビューホテルにおいて、建設業に働く女性職員交流会を開催した。同交流会は建設雇用改善人材育成の一環として会員企業における女性職員を対象に実施したもので交流会には、建設業協会各支部から8名が参加した。

交流会に先立ち、堀江敏明秋田県建設業協会専務理事が「建設業は厳しい環境、男社会と言われる中で、女性の方も進出されていることには敬意を払います。子育て、仕事、家庭の両立等、男性とは違った悩みも多いと思います。この交流会を通じて職場の環境の改善につながればと思います」と挨拶した。

続いて、田代苑子（株）秋田建設工業新聞社副社長を座長に、大山誠子能代市「働く婦人の家」館長を助言者に迎え、「女性職員が働きやすく意欲と能力を發揮できる職場作りに向けて」をテーマに「建設業のよさを感じるとき」「人材の育成」「仕事と家庭の両立」などについて意見交換を行った。

この中で、「建設業はデ

スクワークより人の目につく仕事をしている実感が持てる。頭の中で描いていたものが目の前に出来る達成感がある」とやりがいを語ったほか、「育児休暇は浸透しているが、これからは介護休暇も是非とり入れてほしい。仕事と家庭の両立には会社や家族など一番身近な人からの協力が大切」と周囲の理解を求めた。また職場での良好な人間関係、職場環境の改善については「相手や会社に変化を求めるのではなく、まず自分が動く、自分を変えていく。不満ではなく意見として言いたいことは声に出して言う。お互いに思いやる言葉、言葉遣いに気をつける」などの意見が出された。



東北地整営繕部と意見交換

不調・不落の原因訴える

県協会建築委員会（伊藤久一委員長）は1月20日、秋田県建設業会館大会議室にて、国土交通省東北地方整備局営繕部との意見交換会を開催した。

東北地方整備局では、平成18年度から原則全ての工事で総合評価方式による一般競争入札を実施しており、実施後2カ年半を経過しての状況として、特に営繕工事において参加者が少なく契約に至らない事象が数多く発生していることから、「入札・契約における不調・不落について」をメインテーマに実施した。

委員からは、▽改修工事は、仮設の計上及び養生等に係る諸経費率が少ないので実行予算を出した時点で赤地となる物件もある▽小規模工事は経費負けをする為、企業として受注意欲の優先順位がどうしても低くなる。対策としては、近隣エリア内で小規模工事を組み合わせてロットを大きくする▽小規模工事の場合、請負金額に占める人件費が問題になる。など不調・不落の原因についての意見要望を訴えた。



建設業経営支援セミナーin秋田

1月28日から3日間開催

1月28日から30日にかけて北秋田市、秋田市、横手市の県内3会場で「建設業経営支援セミナーin秋田（主催：秋田県、（社）秋田県建設業協会 後援：東日本建設業保証（株）秋田支店）」が開催され、3日間で県内建設業関係者370名余りが参加した。

セミナーでは元銀行マンの関口清氏（暖企画 代表）による『“そこが知りたい！”「金融機関との上手な付き合い方」』と題した講演が行われた。併せて、後援の東日本建設業保証（株）秋田支店から前払金制度の説明、秋田県建設管理課より▽建設業活力再生事業▽平成23・24年度入札参加資格要件の概要について説明が行われた。



(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

情報コラム Vol.26

秋田県 平成23・24年度 建設工事入札参加資格要件 新規・変更事項

1月28日から3日間開催の建設業経営支援セミナーにおいて、秋田県より表題要件について以下の新規・変更事項が示されました。

つきましては以下抜粋を列記します。

- (1) 社会保険加入を入札参加資格要件とすること
(適用除外事業所を除く)

加入義務のある事業所で、社会保険未加入の者は入札参加資格を申請することができません。

- (2) 新規学卒者等を含む若年者を採用し、継続雇用している者を加点対象とすること

【評価内容等】平成21年4月1日から平成22年6月30日までに、若年者（採用日において30才以下の者）を常時雇用の者として採用し、かつ、継続雇用している場合であって、採用1人のときは20点、2人以上のときは30点（上限30点）を加点する。

※継続雇用…平成22年12月31日時点で継続雇用しているか事後確認を行う。

- (3) 地域貢献活動については、活動内容に応じて個別に加点し、幅を設けること

【評価内容等】対象活動数項目を予定（各3点）

※同じ内容を複数回行っても点数は同じ。

秋田県では上記を含む詳細を「美の国あきたネット」へ掲載予定。

情報が掲載され次第、本会ホームページでもご案内致します。

土木 建築の

近代化 遺産

No.76

那波伊四郎商店(那波紙店)

秋田市大町4丁目3-35



乱立する現代建築群の中で古い町屋として自己主張している明治の伝統的な商家である。旧茶町梅ノ丁の街角、軒の上に「和紙」「洋紙」と彫り込まれた二枚の看板が見える。那波紙店は、秋田藩の御用商人として栄えた那波三郎右衛門家から明治十一年（一八七八）に分家、「升伊」の屋号で茶や砂糖を扱っていた。明治十九年（一八八六）、大町から保戸野一帯を焼け尽くした秋田町の「俵屋火事」（焼失家屋三、四七四戸）によって店舗・住宅が焼失、その後、建てられたのが現在の建物で、それ以来、商売も紙の専門店として続くことになる。

『秋田の町屋・秋田市町屋調査報告書（五十嵐典彦）』によると、「現在、大町に点在する町屋はすべて明治十九年以降のものであり、那波伊四郎家は大火直後に土崎の町屋を移築したと伝えられ、主屋の立ち上がりが高く、屋根勾配もゆるいことから江戸後期の形式を色濃く残している」という。

現在、店舗部分が改造されているものの、住居部分は当初の形式がよく残されている。

ている。木造一部二階建、切妻造の鉄板葺屋根に庇付きで、屋根は最初、小羽葺（こばぶき）だったという。家屋は正面庇と店舗部に改造が加えられているが、通りの角地にあたためるため、店土間が店座敷の周囲に矩形に取り付いている。小路に面して大戸口があつて通り土間に入る。家屋の間取りは二列型で店の奥に客間二座敷が並んでいる。通り土間寄付きの座敷は大戸に向かい合い玄関の部屋と呼ばれていた。その北側の座敷は床の間と神棚を備え、客間の奥の土間付きに才エ（居間）がある。この住居部分は現在使用されていない。通り土間を奥に入ると二棟の土蔵がある。この内蔵は長年にわたって保存が難しい紙を守ってきた。昭和五八年（一九八三）の日本海中部地震で壁が崩れ落ちたが、那波家では改修の手を加えている。

伝統的な建物はその地の風土に合った建て方で生き残ってきたもの。その歴史の重みや風景が現代建築によって崩されてゆくのには残念というしかない。

（取材・構成／藤原優太郎）

—迷訳・誤読— “胡瓜の舟”

菅 禮子

月なきみそらにきらめく光
ああ洋々たる銀河の流れ

こう書き出したら、つけっ放しのテレビからまるで申し合わせたように、いきなりこの詩の曲が流れ出した。「？」と観ると曲は「イノセント・ラブ」というドラマの中に鳴り響いていて、画面には教会の内部が映し出されている。—そうか！この曲はもともと讚美歌なのだ—と気づいた。

詞を思い浮かべたり、口に出したりしたとたんその曲が^{メロディ}我身边に流れ出すという不思議な体験は、これが初めてではなく以前にも一度ある。タクシーに乗って秋田市の郊外を走っていた時、車内ではカーラジオを流していた。放送されているテーマが「懐かしの童謡」となるとかいうので、わたしは日頃、顔なじみの運転手さんに「子供の頃こんな歌が好きだったのよ」とくちずさんでみせた。

るり色の山の向こうの大空に
今日も湧き出た白い雲
やわらかそうな雲の峰
あの峰こえて海越えて
わたしの鳩よ飛んで来い

すると、とたんカーラジオからその歌曲が流れ出し、コメンテーターが解説をはじめたのだ。「えーっ」目を丸くしてふり返った運転手さんにつられてわたしも目を丸くした。

〈閑話休題〉

故向田邦子さん（脚本家 次々と話題作を生み出した）は、少女時代有名な「荒城の月」の歌詞「めぐる盃」を「眠る盃」と思いこんでいた—とエッセイに書かれていたが、似たような体験がわたしにもある。冒頭に書き出した歌詞のあとにつづく二行—

人智は果てなし無窮の彼方に
いざ棹させよや究理の舟に

兄達が歌っているのを空憶えに歌っていたわたしには、てんで意味がわからない。中でも「キュウリノフネ」を「胡瓜の舟」と思いこんでいた。よく墓に供えられた蓮の葉に、茄子に楊子を刺して足にした馬や青リンゴ、橙々色の実で作った数珠等と一緒に胡瓜が載っていたりすると、この胡瓜の舟に乗ってあの世に行くんだな—と思い思いしていた。やがて成長するにつれ、「彼方」とか「究理」の意味を理解するようになったが、これが讚美歌だとは、今初めて知った。

とまれ、子供というのは奇想天外な迷訳をするが、わたしが中学校の国語教師時代に、テストの答案で遭遇した迷訳を次に紹介する。

問1：次の詞の意味を記せ

◆春秋に富む

答 春と秋に一生懸命働いて金持ちになる。

◆春宵一刻値千金

答A 春の晩一時間毎に千円ずつ使う。

B 春の夕方一時間に千円儲けた。

—けだし名答？と言うべきか！—

問2：次の人名に読みがなをつけよ

◆石川啄木

答 いしかわとんぼく

ここに至ってわたしは腹をかかえ、目に涙をためて笑った。本来なら教師即ちわたしの講義を真面目に聞いていなかったのだから怒るべきなのだが……

先頃この国の首相が「未曾有」を「ミゾウユウ」と読んで国民の失笑を買ったが、高位高官のお偉い方がとんでもない誤読をした例はA首相に限ったことではない。時は昭和十年代、所は朝鮮半島京城（現韓国ソウル市）。街の中央に聳える南山の中腹に、当時日本政府によって建造された朝鮮神宮があった。終戦のその日に韓国人の手で打ち壊され、今は跡片もないが、花崗岩で造られた大鳥居は美しかった。神社仏閣には夫々“位”というのがあって朝鮮神宮は“官幣大社”（最高位）だから祭礼の際は天皇の名代として勅使が代参する。その勅使を務めたのが当時の朝鮮総督M陸軍大将だった。陸大卒のM総督は神前で告文（神に捧げる文）を朗読したが、文中の「只管（ひたすら）」を「タダスガア」と読んで、しかもその音声はラジオ放送で巷に流れていたから、当時の識者を呆れさせ、亦、時の京城スズメ達（殊更に人の失敗をあげつらい、事件を大げさに喋り立てる人々）を大いに喜ばせた。

誤読は誰しもあることだが、それにしてもそれこそ未曾有の経済破綻、失職、汚職、殺人、天災人災等々混迷の世の闇の中で、数多の誤読、失言にめげず、四面楚歌、五里霧中の濁流に棹さすA首相の笑顔、明るい性格は稀有と言おうか奇蹟と言おうか、なにか救われる。

棹さすと言えば人類は今、人智を結集した胡瓜ならぬロケット（形は似ているが）に載って無窮の宇宙に究理の旅をしている。で、思いついたのだがロケット内で冒頭の詩の曲と詩句を流したら……騒乱の地球を離れ“宇宙”という神の存在を讃えつつ、その只中に身をゆだね、その原理を究め、地球と人類の救済を目指す旅には、なかなか佳い伴侶と思うが……

※註 冒頭の詩の原典を探っていたところ、小学校の級友河原和子氏（広島市在住）より、次のように資料提供を受けました。感謝！

題名「星の界」作詩 杉谷代水
原曲讚美歌（米）「愁しみ深き友イエスは」
作曲コンバース